九州産業大学国際文化学部紀要　第3号（1995）

「テバイ伝説」について

――伝承の成立とオリエントの影響――

安　永　信　二

（1995年5月10日受理）

序

ボイオティアの古都テバイには，数多くの神話や伝説が存在する。しかしディオニュソスを身ごもりながらヘーラーの奸計により雷霆に打たれたセメレー，アルテミスの裸身を見たために鹿に変えられ殺されたアクタイオン，母アガウエーに八つ裂きにされたペンテウスなど，その多くは悲劇的結末を迎えている。その中でも最も有名な悲劇はオイディプスであろう。父を父と知らずに殺し，母を母と知らずに妻とした彼の悲劇は，5世紀の悲劇作家たちのテーマにされただけでなく，フロイト以下現代の心理学者たちの関心を集めることとなった。

テバイの建国はカドモスに遡る。フェニキア出身のカドモスは，ゼウスに誘拐された姉妹エウローペーを探しにギリシアへやってきたが，見つけることができずにテバイの地に町を建設した。彼はアレースとアフロディーテの娘ハルモニアーを妻に迎えて神々に祝福されたが，悲劇はすでに彼の娘たちにふりかかった。そしてカドモスから数えて6代目，オイディプスの2人の子供エテオクレスとポリュネイケスは，父がかけた呪いのゆえに兄弟同士の一騎討ちで戦死し，次の代にアルゴスに滅ぼされてテバイは繁栄を失ったとされている。テバイの滅亡はトロヤ戦争直前に起きた事件とされており，一連の悲劇はミケーネ時代のテバイを描いたものである。だが，テバイ伝説が完成したのはミケーネ社会の崩壊から数百年を経た後の時代であった。

伝説が成立したころ，ギリシアは「東方化時代」を経験していた。オリエントのさまざまな文物がもたらされ，文化的に大きく飛躍した時代である。ギリシア神話もその影響を受けて完成した。おそらくテバイに関する伝承もオリエント神話の影響を免れ得なかったはずである。では，その影響はいかなる部分に及んでいるのだろうか。また，伝説はテバイの歴史をどの程度忠実に反映しているのか。本稿では，主にテバイ伝説の成立過程に焦点を当てて，この問題について考察を加えてみた。

I　テバイ伝説の成立

(1)　伝承の混乱

まず第一に，テバイ伝説がいつごろ，どのような形で作られたのかを見なければならない。ホメロスの『イーリアス』と『オデュッセイア』，またヘシオドスの『仕事と日々』『神統記』とならんで，暗黒時代末期以降多くの叙事詩や神々への讃歌が作られたことが知ら

れている。このうちテバイに関する叙事詩は，オイディプスの悲劇を描いた『オイディポデイア』，アルゴス軍の7人の武将によるテバイ攻撃とエテオクレスとポリュネイケスの一騎討ちをテーマとした『テーバイス』，その後テバイを攻めた七将の子供たちがテバイを征服する話の『エピゴノイ』の3編である。後代に作られた作者未詳の『歌競べ』では，ホメロスは7,000行の『テーバイス』，同じく7,000行の『エピゴノイ』を作ったこと，また『オイディポデイア』の断片には同叙事詩が6,600行であったことが記されているものの，わずかな断片を除いて他はすべて散逸している(1)。これらがいつ作られたのかも不明であるが，ソフォクレスが『オイディポデイア』に沿って『オイディプス王』を書くなど(2) 5世紀の悲劇作家がこぞってテバイの悲劇を取り上げており(3)，古典期には3編のテバイ叙事詩が流布していたことは確実である。またホメロスとヘシオドスには言及されていないカドモスの出自をヘカタイオスが伝えていることから(4)，6世紀半ばまでにはテバイに関する一連の神話・伝承がほぼ完成していたものと思われる。しかし，これらの叙事詩・伝承が『イーリアス』のように定本化されていたかどうか，以下の諸点から甚だ疑わしい。

1　城壁を築いたアンピオンとゼートスの置かれた年代および彼らの母アンティオペーの親についての史料に統一性がない。

2　オイディプスの4人の子供の母に関する記述が一致していない。

3　テバイ攻めの七将の名および彼らがそれぞれ布陣した門が史料によって異なる。

1　アンピオンとゼートスについて，ホメロスは河神アソーポスの娘アンティオペーの子供たちで，初めて7つの門を持つテバイを構築したと記している(5)。しかし後代の史料にはアンティオペーをニュクテウスの娘とするもの(6)，また彼らのテバイ攻撃をカドモスの時代(7)，あるいはオイディプスの父ラーイオスが幼少だったころとするものもあり(8) 統一されていない。さらに「カドモスが築き，アンピオンが居住」(9)，「カドモスの市に彼らが城壁を構築」(10) など年代を曖昧なままにするものさえある。

2　オイディプスは母を妻としていたことを知った後もテバイを支配したとホメロスに記されているが(11)，悲劇作家は真相が判明した直後にテバイを離れたという設定としているほか(12)，パウサニアスは彼の4人の子供（ポリュネイケス・エテオクレス・アンティゴネー・イスメーネー）の母はオイディプスの母イオカステーではなく，2番目の妻エウリュガネイアであったと述べている(13)。

3　ホメロスおよび『テーバイス』断片に言及されたテバイ攻めの武将は，ポリュネイケス（*Il.* 4 377），カパネウス（*Il.* 4 403ff.），テューデウス（*Il. Od.* passim），メキステウス（*Il.* 23 678ff.），アンピアラオス（*Od.* 15 244ff.），アドラストス（*Theb.* . fr. 4 Allen），パルテノパイオス（*ibid.* 7）の7人である。しかしメンバーの名は3通りに分かれ，また各武将が布陣した門は伝承のすべてで異なっている(14)。

これら各伝承の混乱の他，テバイの3つの叙事詩に定本がなかったと思われる理由はパウサニアスの記述にもうかがうことができる。彼はテバイ攻撃時のパルテノパイオスの死について，テバイ人の言い伝えと『テーバイス』が相違することを指摘している（9-18-6）。さらに，アルゴス市内に置かれていたエピゴノイの彫像は，アンピアラオス・カパネウス・パルテノパイオス・ヒッポメドン・テューデウス・ポリュネイケス・アドラストスの子供たちの像であるのに対し（2-20-5），アルゴスがデルフィに奉納した七将の彫像は，アンピアラオス・カパネウス・ヒッポメドン・エテオクロス・テューデウス・ポリュネイケ

ス・アドラストス・アリテルセスの8体であったという（10-10-3)。これらの彫像は5世紀半ばごろに作られたと彼は考えており，もし同時期の作とすれば，テバイ攻めの武将については，当時のアルゴスにも異論があったことになる。またパウサニアスはアルゴス市内の彫像については，メキステウスを追加すべきとの説明を加えてはいるが，デルフィでパルテノパイオスが除外されていることには無言のままである。おそらく彼自身，テバイ攻めの七将とエピゴノイについてあまりに多くの異伝の存在に戸惑ったのであろう。

『テーバイス』として伝わる断片の内部にも矛盾は存在する。テバイ攻めの原因となった「オイディプスの呪い」はさまざまに伝えられているが，『テーバイス』のある断片にはカドモス家伝来の家宝を子供たちが勝手に使ったため（fr. 2)，ところが別の断片では（おそらく犠牲獣の）臀肉（ischion）を子供たちが彼に与えたため（fr. 3）に兄弟争いで破滅するよう呪ったとされている。

このように，古典期には互いに相容れない伝承が多く存在していた。それゆえ，テバイの叙事詩3作品は文字化された時にはすでにいくつかのヴァージョンがあった，あるいは一時的に文字化されたにもかかわらず，早い時期に散逸して断片的にしか残らなかったかのいずれかであることは明白である。このため後代の悲劇作家や神話学者らがテバイの伝説を繙いた時，さまざまな言い伝えがあることを知り，彼らはその中で最も真実に近いと考えたものを採用したのではないかと推測される。

さて叙事詩の原型となったテバイの伝説についてだが，これはかなり古い時期に遡る。ホメロスとヘシオドスはテバイに関して以下の物語を自らの詩の随所に挿入している。

1　アンピオンとゼートス：初めてテバイの城壁を構築[15]
　　リュラ（竪琴）を弾きながら城壁建設[16]
　　アンピオンの妻ニオベーの悲劇[17]
2　カドモスの妻と子供たち：娘イーノー[18]
　　妻ハルモニアー[19]，娘イーノー，セメレー，アガウエー，アウトノエー，息子ポリュドーロス[20]
3　スフィンクスの災い：テバイ人にとって破滅の原因[21]
4　オイディプスの悲劇：母（妻）エピカステーの縊死[22]
5　アルゴス軍のテバイ攻め：テューデウスの活躍[23]
6　アンピアラオスの逸話：妻が受けとった贈り物のゆえにテバイで戦死[24]
7　エピゴノイ：テバイの陥落[25]

このうち4・5・7がテバイの3つの叙事詩の原型となっているもので，3のスフィンクスはオイディプス伝説に属する逸話（ただし独立した神話だったのが結合したかも知れない)，また6のアンピアラオスも七将伝説に付随する物語であるが，オイディプス伝説は，スフィンクスの災いと母イオカステー（エピカステー）の死に触れられており，ほぼ完成した形で伝わっていた。一方1と2はテバイの建国神話である。しかし両者に関連性は持たされておらず，おそらくテバイあるいはボイオティア地方に昔から伝わっていた神話かと思われる。一見してわかるように，個々の神話や伝承は単体としての完成度は高いものの，後のテバイ伝説のように，つながりを持っていない。アンピオンとゼートスがどの時代に属する英雄か，あるいはオイディプスの呪いがいかなる理由によるものか，またテバイの歴史など，脚色は十分なものではない。それゆえホメロスの時代までそれぞれの物語

は，つながりがないまま単独に語られていた民話的な存在であったかと考えられる。

(2) 英雄崇拝と叙事詩の発達

叙事詩が盛んに吟じられていたころ，ギリシア世界では文化的な大変革が起こった。アルファベットの導入である。今世紀はじめごろまではギリシア文字の発明は紀元前1000年前後と考えられていたが，R. Carpenter により年代が大きく引き下げられ[26]，現在では800年前後という説が支配的である。また近年フェニキア人がもたらしたのではなく，エウボイアに住む1人のギリシア人がホメロスの叙事詩を書き写すためにフェニキア文字を改良したとの意見も出された[27]。この意見の是非はともかく[28]，ギリシアでアルファベットが使われ始めたのが8世紀前半であること[29]，またホメロスの叙事詩が文字の導入の直後あるいはそのしばらく後に文字化されたことはほぼ間違いない[30]。無論，叙事詩の文字化の背景には吟唱詩人の幅広い活動があった。『オデュッセイア』の中でパイエーケスの王アルキノオスが吟唱詩人デーモドコスを敬意をもって遇したように（8 487），この時期各地の族長や豪族たちが催す宴には欠かせないものであった（1 152f.）。そして聴衆に最も好まれたのは主にトロヤ戦争をテーマとする英雄叙事詩だったのである（8 74）。

こうした英雄叙事詩の隆盛に刺激されて，英雄崇拝の風習が生まれた[31]。アルゴリス，メッセニア，ボイオティア，アッティカ等のギリシア本土各地では，8世紀後半以降多くのミケーネ墓から奉納品が出土している。これらの地域ではミケーネ社会の崩壊とともに墓制が大きく変化したため，トロス墓や岩室墓などのミケーネ墓は使用されなくなっていた[32]。しかし吟遊詩人に影響された住民は，これらのミケーネ墓を叙事詩に登場する英雄たちの墓所として，驚きと畏敬の念をもってみるようになった。そして後期青銅器時代ごろから陶器類を中心に奉納品が捧げられるようになり，ミケーネ墓を利用して英雄崇拝の儀式が執り行なわれていたと考えられている。

英雄崇拝は逆に叙事詩の発達を促した。ホメロスの二大叙事詩よりやや遅れて6編のキュクロス（トロヤ叙事詩圏：二大叙事詩を含む8編を指す）が作られた。ミレトスのアルクティノス著とされる『アイティオピス』と『イリオン陥落』，ミュティレネのレスケス（もしくはレスケオス）の『小イーリアス』など，伝承によれば8世紀から6世紀にかけてこれらの叙事詩群が作られたという。テバイ叙事詩3作も例外ではない。『オイディポデイア』は年代不詳だが古典期以前の叙事詩人キナイトンの作，また『テーバイス』と『エピゴノイ』はホメロス作とされている。しかし，さまざまに異なる伝承の存在と内部矛盾は，ホメロスのような定本化がなされずに複数種類の伝承があったこと，また複数の伝承が後代まで伝わったのは，それらの伝承がそれぞれ文字化されていたことによる。さらに複数の文字化された伝承の存在は，すなわち文字の使用がかなり一般的となっていた時期に，これらの叙事詩が文字化されたことを示唆している。したがって広い年代範囲ではあるが，テバイの叙事詩はホメロスよりかなり遅れて，だが前述したように6世紀半ばまでには完成していたと考えて差し支えあるまい。

II テーベの発掘

以上の通りテバイに伝わる神話と伝承はホメロス以前から語られていたが，叙事詩として文字化されたのはホメロスよりも後の時代であった。ではこれらの伝承は歴史事実とい

かなる関係を持っているのだろうか。今度は考古学の調査結果からテバイの歴史を見てみることとしよう。

今世紀に入ってテバイの調査は本格的に進められるようになったが，現在の町の下に遺跡が眠っているため，今でもごく一部しか発掘されていない。また，包括的な発掘報告書も出されておらず，詳細は明らかにされないままにいる。

これまでの調査により，現テーベの町を南北に走るエパミノンダス通りとペロピダス通りの間に王宮と見られる建築物があったことが知られている。この王宮と付属する複数の部屋では，青銅や象牙の製品，カッシート時代の楔形碑文，40前後の円筒印章，あぶみ壺，線文字Ｂ文書などが出土した(33)。これらの出土品により，テバイが東方やクレタと深い関係を持っていたものと目されている(34)。とくに1000年以上にわたるバビロニア，カッシート，ミタンニ，ヒッタイトなどメソポタミアやアナトリアなど物品が出ていることから，カドモス伝承はテバイがカナーン人の商業拠点だったことを示唆しているという意見(35)，また印章の１つにカドモスとも読める Kidinmarduk（＝“magical protection（of the God）Marduk”）の銘が彫られていることも指摘されている(36)。しかしこれらは憶測の域を出ておらず，これ以外にカドモス伝承と結びつける確固たる証拠は出土していないが，いずれにせよ，ミケーネ時代のテバイが独自に海外と接触を持っていたことが判明しており，当時ボイオティア地方の強国だったことは事実であった。

さて，考古学上の最大の問題は，王宮の焼失年代とその数である。数については，１つであったとする説と２つとする説に分かれている(37)。これまでにテーベでは，王宮風の大きな建築物が２つと，それに付属すると考えられる小建築物がいくつか発見された。２王宮説を支持する研究者は，第１王宮（「カドメイオン」）は後期ヘラディック時代第ⅢＢ期（ＬＨⅢＢ：以下略記＝13世紀）初期の陶器が出土しているが，第２王宮はＬＨⅢＢのみの陶器とＬＨⅢＡ（14世紀）の宝飾品が一部見つかっていることから，第１王宮はＬＨⅢＡに炎上，第２王宮はＬＨⅢＢに破壊されたと考えている。また第２王宮は現在の町並と同じく南北方向に建てられているのに対し，第１王宮の礎石は約30度ずれていること，さらに２つの建物が200メートルほど離れていることもその根拠としている。１王宮説は破壊の時期はＬＨⅢＢの１回のみであり，２つの建物の方向が異なるのは建設年代が違うため，また離れているのは「別邸」的存在であったとして譲らない。この相容れない意見はテーベの発掘が部分的でしかなく，建物全体の構造が把握できてないために生じたものであり，現時点での解決は不可能である(38)。

テバイの最終的倒壊の時期についてはＬＨⅢＢ末期の直前（13世紀半ば）ということでほぼ一致している(39)。しかしこの年代はテバイを征服したエピゴノイらがトロヤ戦争に参加しているというホメロスの記述を意識した結論にすぎず，考古学調査の結果を重視した場合には，倒壊の年代はＬＨⅢＡ末(40) からⅢＣ初期(41) まで幅広いものとなる。

このようにこれまでの考古学の調査結果からは，フェニキア人カドモスがギリシアへ移住してテバイを建設した，あるいはエピゴノイらのアルゴス軍に征服されたという伝承を決定的に証拠づける出土品は発見されていない。それでもＬＨⅢＡからⅢＢ期にかけてテバイはオルコメノスとボイオティア地域を二分する勢力であったこと(42)，また海外－とくにオリエントとクレター－と独自の接触を持っていたことは，神話・伝説の題材を提供するだけの強国であったことを十分裏づけるものとして認められよう。

Ⅲ 吟唱詩人と英雄叙事詩の成立

考古学の調査結果からは，テバイの歴史についての詳細を得ることはできなかった。そこで今度は，叙事詩がどのような過程で成立するのかを検分することによって，テバイ伝説の核に迫ってみたい。

M. Parry が同時代のユーゴスラヴィア吟唱詩人を対象に口承詩の研究を行なった結果，口承詩は一人の詩人の中でも刻々と変化し，時には異なる複数の物語を即座に結合させることさえあることを発見した。そしてホメロスも例外ではなく，現在残されている『イーリアス』と『オデュッセイア』もこのような口承詩の産物であることを証明した(43)。この画期的な研究には反論も一時試みられたが(44)，今ではほぼ認められており，口承叙事詩という点からのホメロス研究の基礎となっている。しかしホメロスの描く時代がどの時期であるかについては，依然として意見は統一されていない。ホメロスは基本的に後期青銅器時代のできごとを語っているとする Nilsson の意見(45) を修正してミケーネ時代に関する記述もかなり残されているとする説(46)，ミケーネ時代のものはほとんど含まれておらず10～9世紀が時代背景であるとする説(47)，さらにホメロスが生きていた8世紀が中心であるとする説(48) があるなど，学説は細分されている。

ホメロスの中にミケーネ時代に関する記述が含まれているのは事実である。牡牛の皮を7枚重ねて青銅を被せたアイアースの大楯(49) は，すでにミケーネ時代末期には使用されておらず，前12世紀以降は胴体を保護するだけの小型の丸楯が一般的となっていた(50)。また，ミケーネ兵士特有の猪の牙のヘルメットや青銅の武器など，明らかにホメロスが吟唱していた時代のものとは異なる品々が含まれている。ホメロスはこれらを聴衆に対して懐古的な演出効果を意識的にねらったかどうかはわからないものの(51)，叙事詩が語りはじめられたころからの，あるいはミケーネ時代からの伝統が変えられないままに残されていた(52)。

また何度も繰り返される定型句や，固有名詞につけられた枕詞的な形容詞も変化を蒙ることは少ない。たとえば戦いで勇士が死ぬ様子を「両目を暗闇が覆った (skotos osse kalypse)」(53)，また夜が明ける様に「サフラン色の衣をまとった暁の女神 (Ēōs krokopeplos)」(54) が「不死の神々に (athanatoisi)」(55) 光をもたらす，あるいは「バラの指を持つ暁の女神が現われる (ēriogeneia phanē rhododaktulos Ēōs)」(56) という表現が頻繁に使われている。一方，「牛の瞳の女神ヘーレー (boōpis potnia Hērē)」(57)，「黄金に富むミュケーネー (polychrysoio Mykēnēs)」(58)，またエーゲ海を「葡萄色の海 (oinops pontos」(59)，あるいはアキレウスには「足迅き (podas ōkys)」(60) や「高貴なる (dios)」(61) など30以上もの飾り詞が冠されている。これらの定型句と飾り詞は韻律上，どの場所に置かれるかによってどの語句が使用されるかが決定されており，ほぼ不変であった。これに対し，後代につけ加えられた部分も多く存在する。ギリシア世界で独立した神殿が出現するのは8世紀あるいはそれ以前とされているが(62)，ホメロスには屋根のついた神殿が9箇所出てきている(63)。また『イーリアス』の第23書はアキレウスが戦死した親友パトロクロスのために盛大に火葬の儀式を執り行なっている章である。しかしトロヤ戦争が行なわれたとされる12世紀は土葬が一般的で(64)，それ以降の11～7世紀は8世紀のアッティカの一時期を除いて葬制の主流は火葬であった(65)。このようにホメロスら吟唱詩人は物語の筋に影

響しない部分では，同時代の事物や慣行を織り混ぜながら聴衆の理解を求めていた。

吟唱詩人はこれにとどまらず，ギリシア世界に入ってきた東方の目新しい品々を紹介して聴衆の興味を集めた。ヘーラーがピアスした耳たぶに着けた「3つの粒のついた耳飾り (hermata …… triglēna moroenta)」[66] は，おそらく東方から当時もたらされたたいへんに貴重な宝飾品であった[67]。またパトロクロスの葬送競技でアキレウスが短距離走の優勝賞品として提供した混酒器もその一つである。彼は，「細工にすぐれたシドン人が美事に作り上げた (Sidones polydaidaloi eu ēskēsan)」「美しさでは世界でも類を見ない (kallei enika pasan ep'aian pollon)」「銀のすばらしく仕上がった混酒器 (argyreon krētēr tetygmenon)」をフェニキア人がはるばると海を越えて運んできたことを長々と説明する[68]。銀の混酒器は『オデュッセイア』の中でもきわめて貴重な品として扱われている。メネラオスはオデュッセウスの息子テレマコスへの贈り物としてこれを与え，その由来を説明した。メネラオスがトロヤからの帰途，シドンの王パイディモスの館に泊まった折に彼から受け取った，ヘファイストス神が作ったとされる金で縁取りされた銀の混酒器であると。ホメロスはこの混酒器をまったく同じ表現を使って2度説明している[69]。

フェニキアという言葉はすでにミケーネ時代から知られていた。線文字B文書では，po-ni-ki-pi, po-ni-ki-ja, po-ni-ki-jo などの語が現われている。しかしこれらはカナーン人が居住するシリア南部沿岸地域の特産であったホネ貝を原料とする貝紫の色，および同地域の香料等を指し示したもので，フェニキア人という意味はなかった[70]。これらの物品を生産するカナーン人が，鉄器時代に入ってフェニキア人と呼ばれるようになったのは，おそらく po-ni-ki-jo 等をもたらす，もしくは生産する民族というミケーネ時代からの言い伝えによるものと思われる。事実フェニキア人という呼称はホメロスの時代には定着しておらず，フェニキアの都市国家シドンの名に因んで，シドン人と呼ばれることも多かった[71]。

さて，すでにミケーネ時代からギリシアと東方との間には交易が行なわれていた。しかしこの時はミケーネ（ギリシア）人が東地中海に進出し，キプロスの銅，オリエントの円筒印章，あるいはスカラベなどを持ち帰っている[72]。この関係は12世紀以降のギリシア世界の混乱によって中断したが，9世紀ごろから今度は逆にフェニキア人が西方に乗り出す形で再開された[73]。そしてホメロスに歌われたヘーラーの耳飾り，それにアキレウスとメネラオスの混酒器は，明らかにフェニキア人たちがもたらした品々であった。

吟唱詩人たちは，叙事詩のいたるところに東方からの輸入品をちりばめることで聴衆の注意を引きつけたが，叙事詩の内容そのものを，輸入されたオリエント神話の模倣に頼ることさえあった。最も有名な箇所がアフロディーテの訴えである[74]。

トロヤ方に味方したアフロディーテは，ギリシアの武将ディオメーデースに殺されそうになったアイネイアス（クレタで牛飼いをしていたアンキーセースとアフロディーテの子）を救うべく，戦陣に割って入った。これを見つけたディオメーデースは槍で彼女の手を傷つけ，「か弱い女たちを誘惑するだけでは足りないのか (*Il.* 5 349)」と叱責して追い払った。アフロディーテはオリンポスへ昇り，母ディオーネーに悔しさと怒りをぶつける。ディオーネーはやさしく介抱するが，ゼウスは戦さはアフロディーテの仕事ではないと微笑みながら彼女を諭した (*Il.* 5 311-431)。

紀元前3千年紀にその起源が遡るとも言われる『ギルガメシュ叙事詩』にも同様の場面

が存在する。怪物フンババを倒したギルガメシュを女神イシュタルが誘惑するが，彼は彼女の以前の愛人たちの非業の運命を数えあげてこれを拒絶した。イシュタルは怒って天に昇り，父アヌと母アントゥムに訴えたところ，アヌはイシュタルの振る舞いが招いたことだと諭している（6-5-94)。

両者の構成要素はまったく同じである。英雄の女神叱責→女神の怒り→父神への訴え→父神の説諭という展開ばかりでなく，中心人物が性愛の女神である点，また母神が父神の女性形であることまで一致している。ホメロスはアフロディーテをゼウスとディオーネーの娘としているが，ヘシオドスではディオーネーはアフロディーテはクロノスに切り取られたウラノスの男根から生まれた女神（*Theog.* 188ff.）とされている。またこの箇所だけディオーネーがゼウスの妃的存在として登場し，しかもアントゥム（アヌの女性形）と同じ設定，すなわちゼウスの女性形となっている。この他多くの点でギルガメシュ叙事詩の強い影響があったことが指摘されており，ホメロスが何らかの形でオリエント神話に接し，これを自分の詩作に利用したことは十分に考えられる(75)。

このようにホメロスおよび彼と同時代の吟唱詩人たちは，当時フェニキア人がもたらした東方の物品ばかりでなく，オリエント神話をも自分の詩に採り入れて技を磨き，名誉と尊敬を得ようとした。殊に聴衆の要求に応じて短篇の詩あるいは創作の詩を朗読する場合には，詩人のこうした技量はいかんなく発揮されたことであろう(76)。

Ⅳ　テバイ伝説とオリエントの影響

テバイ伝説にもオリエント神話が色濃く反映している。アッカドの『エラ叙事詩』と対比される「七将」の物語もその一つである。9〜8世紀ごろカプティーイラーニーマルドゥクという名の詩人によって作られた同叙事詩は，戦争と疫病の神エラがバビロニアに破壊をもたらすが，最後には生き残った人間たちが平和のありがたみを痛感するという，バビロニアの経験した多くの歴史的災難を象徴的に描いた作品である。ここでは天と地の神の無比の勝者とされた7人の息子たちが，バビロニアの守護神マルドゥクを地下の世界へ行かせ，エラとともに地上に赴いて人類を殺戮するが，完全に滅ぼしてしまう前に引き上げている。W. Burkert はここに表わされた「7人の無比の勝者」,「攻撃と退却」という要素がギリシアに伝わり，「七将」の物語としてテバイ伝説と連結したと捉えた。さらに後期ヒッタイトのレリーフに描かれた兄弟同士の争いも，エトルリア，ヘブライ，ローマなどにもたらされが，ギリシアにも伝わってテバイのエテオクレスとポリュネイケスによる一騎討ちにつながったことを示唆する(77)。

また，テバイ伝説に登場するテイレシアースもオリエントから来た予言者たちの一人であるという可能性を否定することはできない。テイレシアースの娘マントーの子にモプソスという予言者がいた。彼は鳥占師カルカスと無花果の木にいくつの実がなっているかを競って勝ち，カルカスを自殺に追いやった話で有名である(78)。しかし彼の名はギリシア以前すでにヒッタイトの文書に現われていた。同様にリディア，フェニキア，キリキアにもその名が見られるという(79)。そして彼とアンピアラオスの子アンピロコスはキリキアのマロス市を建設したとの伝承も存在する(80)。このキリキアこそ，ミケーネ時代後期の一時期ギリシア人が居住し，8世紀になって再び接触を持つようになった地域である(81)。またギ

リシアとオリエントの接点となり,「東方化」の窓となった交易都市アルミナはこの近隣に位置する[82]。このような地域と関わりを持ち，東方にその起源が遡れるテイレシアースやモプソスが，オリエントから入ってきた占い師たちの一人であったとしても不思議はない。予言者のみならず占いの方法も同様にオリエントから輸入された。ホメロスに登場する占いの一つ，贄占も，メソポタミアからキプロスやタルソスに伝わった肝臓占いと同種のものであった[83]。

ミケーネ時代以来数百年振りにシリア北岸を訪れたギリシア人は，彼の地でオリエントの文物に接し，それらをギリシアへ持ち帰ったはずである。その中で最も重要なものはアルファベットだったかも知れない。だがこの他にも天文学，暦法など実用的な学問，またオリエント神話，さらに肝臓占いや鳥占いなどの呪術的風習も含まれていた[84]。テイレシアースやモプソスも当時ギリシアに入ってきた最新の「輸入品」として，吟唱詩人に採り入れられたのではあるまいか。実際，5世紀の悲劇詩人たちはテイレシアースを「真実を見極める」あるいは「先を見通す」能力を持つ人物として描いているのに対し，『オデュッセイア』では主にオデュッセウスの帰国方法と道中の注意を与える役割しかない[85]。しかしこれも彼がオリエントから海を渡ってギリシアに入ってきたばかりの輸入品だと考えれば，航海に関する諸注意を専らの仕事としていたことも首肯できよう。

これまで見てきた限り，テバイ伝説の中心を形成する「七将」と「兄弟争い」，それにテバイの重要人物テイレシアースまでもが，オリエントからの輸入品であろうことがわかった。すなわちテバイ伝説は，ホメロス以前から語られてきた伝承に,「東方化時代」と呼ばれた時期ギリシアにもたらされたオリエントのさまざまな文物や風習，それに神話を採り入れて脚色された物語であった。

ここでテバイ伝説の原型について振り返ってみよう。前述したようにテバイ叙事詩の核となった伝承がホメロスとヘシオドスによって語られているが，アンピオンとゼートスの伝説はカドモスとは無関係の建国神話であったことは明らかである。カドモスもテバイ建国の祖と言われており，後代の作家らは両伝説を結びつけるのに苦労したのであろう。彼らの位置する年代にカドモス以前，カドモスの直後，ラーイオスの幼少期とさまざまなヴァリエーションがあるのはこのためである。こうした年代的混乱は，アンピオンの妻ニオベーがタンタロスの娘でペロプスの姉妹とされている設定，およびオイディプスの悲劇の原因をラーイオスがペロプスの息子クリュシッポスを誘拐したことに求める伝承の両者が合体したために生じたものである。この結果アンピオンとラーイオスが同時代の人間とされてしまった。これは，ホメロス以後の吟唱詩人（あるいは叙事詩作家）が神話に年代的整合性を持たせるため，もしくは因果関係をはっきりさせるために，無関係の2つの神話を結びつけたことによるものではないかと筆者は考えている。

さらに，カドモスの出自さえもテバイ伝説が完成する過程で付加されたものだったかと思われる。「パロス大理石」によればカドモスのカドメイア建国は1518/7年とされており[86]，テバイではすでに1500年ごろまでには王国が形成されていたことも認められている。また先に見た通り，テバイが海外と独自の接触を持っていた事実から，テバイが非ギリシア人による建国かも知れないという考えを完全に捨て去ることは難しい。とくにクレタとの関わりを追究していくことは，カドモス伝承解明の鍵となる可能性を秘めている。しかしアルファベットがギリシアにもたらされたのは800年前後であること，ミケーネ時

代の交易はギリシア人が積極的に海外へ乗り出して行なわれていたこと，またフェニキア人が海外進出を開始するのは9世紀以降であることなどを考えれば，カドモスが「アルファベットをもたらしたフェニキア人」という伝承がホメロス以前から流布していたことはあり得ない(87)。後代，何らかの理由でカドモスとフェニキア人が結びつけられたものであろう。そしてこの組合せはペルシア戦争後も生き続け，ヘロドトスや悲劇作家たちに当然の事実として受け入れられたのではないだろうか。

一方，オイディプスとスフィンクスの関係は他の神話に類似する。海の怪物を倒してアンドロメダを獲得したペルセウスや，キマイラを倒してピロノエーを手に入れたベレロポンと同じく，英雄の怪物退治と王女獲得という一般的な筋書きである。ペルセウスは明らかにオリエント神話を模倣して作られた物語であり(88)，ヘラクレス伝説でも「海岸の岩に縛りつけられた裸の王女」と「海の怪物」それに「怪物を倒して王女を獲得」というペルセウスとまったく同じ展開が繰り返されているように，ギリシア人は好んでこのテーマを使った。オイディプス伝説も基本的にこれらの神話と同じモチーフが採り入れられており，オリエント神話の要素にテバイにまつわる悲劇的性格が加味されて作られた物語と考えて差し支えあるまい。

これらに対し，アルゴス－テバイ戦争はホメロスが『イーリアス』の中で変わらぬ口調で何度も繰り返す話である。殊にテューデウスはテバイ攻撃の準備（4 375ff.），テバイへの使者とそこでの武勲（4 384ff.；5 803ff.；10 285ff.），家系の説明とテバイでの戦死（14 114）と，同戦争の主人公的存在として扱われている。それゆえこの戦争の叙事詩がアルゴスもしくはテューデウスの父の故郷アイトリアに伝わる伝承だったことも考えられるが(89)，ともかくホメロス以前からトロヤ戦争とともに広く流布していた叙事詩であった。同戦争が歴史的事実か否かの結論はさらなる考古学の成果を待たなければならない。しかし，トロヤ遠征軍がボイオティアのアウリスから出航したという伝承，ホメロスの「目録」からテバイが脱落している事実，さらにトロヤ戦争直前にアルゴスの祭祀がボイオティアに広がったとする指摘など(90)，アルゴスによるテバイ征服を仄めかす状況証拠も少なくない。もしこれらをテバイ征服の証拠とみなし得るならば，テバイ－アルゴス戦争がこれまでに見たテバイ伝説の中で唯一の歴史的背景であり，同戦争に付随する七将・兄弟同士の一騎討ち・テイレシアースなどの逸話は，この唯一の事実につけ加えられたオリエント神話からの借用による物語だったと考えることができよう。

結　　語

8世紀末，エウボイアでミケーネ時代以降最大規模の戦争が起こった。カルキスとエレトリアとが戦ったレラントス戦争である。両市の間に広がるレラントス平野の領有が原因とも言われるこの戦いは(91)，ツキュディデスによればギリシア諸ポリスを巻き込んだ戦争であったという(92)。勝敗の結果を彼は報告していないが，カルキス南部に位置し古エレトリアと目されるレフカンディがこの時期放棄されていることから，カルキスの勝利に終わったものと推測されている(93)。勝敗は別にして，史家の記すように諸ポリスが参加したことが事実であれば，当時のギリシア人は大きな衝撃を受けたにちがいない。吟唱詩人が語るトロヤ戦争と同様の戦争が身近で行なわれたからである。この戦いで戦死した武将た

ちは英雄とみなされ，葬儀では競技大会が開かれた。この競技会では詩人たちによる歌競べも行なわれた(94)。つまりこの戦争が，ホメロスの描く英雄の世界を再現するものとなったのである(95)。ギリシア本土では英雄崇拝の風習が広まるなど，ホメロスの与えた影響は多大であったが，レラントス戦争を聞き知った民衆は大きな感銘を受け，さらに多くの英雄叙事詩を待ち望んだことであろう。吟唱詩人は新しい詩の開拓に努め，トロヤ戦争をテーマとしたキュクロスを作ったほか，ホメロスに登場する断片的なアルゴス－テバイ戦争に肉付けしてテバイ伝説を完成し，同時に叙事詩3編を生みだした。

彼らは肉付けの段階で一部はさまざまに伝わるテバイの伝承をつなぎ合わせたが，大半はオリエント神話を大胆に模倣した。もっともアンピオンとゼートスの神話は完全に独立していたため，不自然な形でしか挿入できなかったのかも知れない。しかし，オイディプスはカドモスの系譜に入れ込むことに成功した。その上でそれぞれの悲劇に因果関係を持たせようとした。アルゴスがテバイを攻めたのはオイディプスの呪い，オイディプスの悲劇の原因は父ラーイオスがクリュシッポスを誘拐したこと，そしてテバイを多くの悲劇が襲った最大の原因を建国者カドモス自身に被せようとしたのではなかろうか。すなわち，フェニキア人が建国したテバイは滅びる運命にあったのだと。本稿でフェニキア人の活動に触れる余裕はなかったが，『オデュッセイア』で語られるように，フェニキア人の評判はこの時期急激に下がっていく(96)。彼らの商行為，あるいは地中海進出でのギリシア人との競合にもよるが，オリンピア競技の発展やホメロスの叙事詩で目覚めたギリシア人の民族意識を無視することはできない。そしてテバイ伝説が作られた背景には，こうした民族意識が見え隠れしている。皮肉にも『イーリアス』をはじめオリエント神話の影響下に作られた数々の英雄叙事詩が，ギリシア人に民族としての自覚を喚起する契機となったのであった。

注*

＊　本稿で取り扱った年代はすべて紀元前である。

（1）　3作の原文が現存しているのはこのうちわずかに20行余りにすぎない。 T. Allen O.C.T. *Homeri Opera* V

（2）　Athen. 7-277E

（3）　三大悲劇詩人の作品250編余のうち（断片を含む），アイスキュロスの『エピゴノイ』やエウリピデスの『アンティオペー』等29編が本稿で扱うテバイ伝説をテーマとしている。岩波書店『ギリシア悲劇全集』1990～参照。

（4）　*FGH* (*Die Fragmente der griechischen Historiker* Jacoby, F. Leiden 1955～) 1 F119.

（5）　*Od.* 11-260ff.

（6）　Paus. 9-5-6ff.

（7）　Diod. Sic. 19-53

（8）　*FGH* 90 F7; Paus. 9-5-6ff.

（9）　Soph. *Ant.* 1155f.

(10)　Eur. fr. 223 (*Antiop.*)

(11)　*Il.* 23-679ff.; *Od.* 11-271ff.

(12)　Soph. *Oed. Col.* 1591ff.

(13) Paus. 9-5-11; Cf. *FGH* 3 F 95, Apol. *Bib.* 3-4-5.

(14) ホメロス等で言及された7人のうち，アイスキュロスとソフォクレスはアドラストス・メキステウスを外してヒッポメドン・エテオクロスを，またエウリピデス（アポロドーロスも彼に従っている）はメキステウスの代わりにヒッポメドンを加えている。各武将が配置された門，および7つの門の名称も史料によって大きく異なっている。 See Ziehen, L *RE* (*Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*) s. v. *Thebai.* esp. 1428ff.

(15) *Od.* 11-271ff.

(16) Hesiod. fr. 182 (M-W)

(17) *Il.* 24-602ff.

(18) *Od.* 5-333

(19) *Theog.* 937

(20) *Ibid.* 975ff.

(21) *Ibid.* 325ff.

(22) *Od.* 11-271ff.

(23) *Il. passim.*

(24) *Od.* 15-239ff.

(25) *Il.* 4-406 etc.

(26) Carpenter, R. "The Antiquity of the Greek Alphabet" *AJA* 37 1933 8-29; *Idem.* "The Greek Alphabet Again" *AJA* 42 1938 49-69. 彼はギリシア人がフェニキアからアルファベットを受容した年代を700年前後と考えた。

(27) Powell, B. P. *Homer and the Origin of the Greek Alphabet* 1991 Cambidge 221, 232f.

(28) Powell は，ホメロスの叙事詩を筆写した人物は，ギリシア神話の中でアルファベットを発明したとされるパラメーデースだと考えているが，彼の実在性を証明することは難しい。 *Ibid.* 233-6.

(29) ギリシア文字の成立について，フェニキアのアルファベットを母体にしてΦΧΨの3文字を独自に追加したこと，北セム系アルファベットは前1000年ごろ完成したこと，が基本的事項として考えられているが，これらの見解に対して否定的な意見も少なくない。 See Albright, W. F. "Some Important Recent Discoveries: Alphabetic Origins and the Idrimi Statue" *BASOR* 118 1950 11-20; Bernal, M. *Cadmean Letters -The Transmission of the Alphabet to the Aegean and Further West before 1400 B. C.*-1990 Eisenbrauns esp. 123-8. これ以外の大半の研究者は800～750年にアルファベットが導入されたものと考えている。 See Jeffery, L. H. *Archaic Greece* 1976 London 25; Snodgrass, A. *Archaic Greece* 1980 London 81.

(30) Powell (*op. cit.*) は，現在発見されている土器片などに刻まれた8～7世紀の「落書」にヘクサメトロン調の詩が多いことなどから，アルファベットの導入は叙事詩の筆写が目的であったとする Wade-Gery の説を証明した。上注 (28) で述べたように彼の考えをすべて受け入れることは難しいにしても，たいへんに説得的な論考と思われる。

(31) Coldstream, J. N. "Hero-cults in the Age of Homer" *JHS* 96 1976 8-17.

(32) Kurtz, D. C. & Boardman, J. *Greek Burial Customs* 1971 London 21ff. ギリシア本土でも例外的にトロス墓が再利用あるいは新規に作られた。また，クレタやロドスなどの島嶼部では岩室墓が使用されていた。 *Ibid.* 170 ff. Coldstream *op. cit.* 13f.

(33) Muhly, J. D. "Homer and the Phoenicians" *Bertys* 19 1970 19-64, esp. 37ff.; Schachter, A. "The Theban Wars" *Phoenix* 21 1967 1-10, esp. 8f.; Catling, Cherry, Jones & Killen "The Linear B Inscribed Stirrup Jars and West Crete" *BSA* 75 1980 49-113.

(34) Taylour, L. W. *The Mycenaeans* 1964 rev. ed. 1983 London 157; Blegen, C. W. "The

Expansion of the Mycenaean Civilization" *CAH* 2-2 3rd ed. 1975 Cambridge 168f.; Catling, Cherry, Jones & Killen *op. cit.* 83, 92ff.; Betancourt, P.P. *The History of Minoan Pottery* 1985 Princeton 173f.

(35) Sasson, J.M. "Canaaite Maritime Involvement in the Second Millennium B.C." *JAOS* 86 1966 135 n. 53.

(36) Daux, G. "Thèbes" *BCH* 90 1966 848-50 (Chroique des Fouilles 1965); Hemmerdinger, B. "Trois Notes -I Kadmos II Emprunts du grec mycènien à l'akkadien III L'infiltration phénicienne en Béotie-" *REG* 79 1966 698-703, esp. 698.

(37) テーベの本格的な発掘は今世紀初め Keramopoullos, A. によって進められたが，王宮の数についての論争は，その後テーベの発掘に携わった Symeonoglou, G. と Spyropoulos, Th. の意見の相違に端を発し，歴史学者がいずれかに与することで発展した。筆者は発掘報告書を吟味してないため論争に加わることはできないが，本文に述べる通り，さらに規模の大きな発掘調査が行なわれない限り結論は出ないものと考えている。Spyropoulos, T.G. "The Discovery of the Palace Archives of Boeotian Thebes" *Kadmos* 9 1970 168-72; Schachter *op. cit.* 8f.; Taylour, *op. cit.* 157.; Buck, R. J. *A History of Boeotia* 1979 Edmonton 40ff.; Mountjoy, P.A. *Mycenaean Pottery* Oxford 1993 16f.

(38) Catling らは (Catling, Cherry, Jones & Killen *op. cit.* 95ff.) 発見された建物が「王宮」であるかどうかを再検討した上で，クレタ諸王宮と比較することを提唱している。テバイとクレタは神話でもつながりを持っており（エウローペーとカドモス），Catling らの考えが事実だと判明すれば，テバイ建国を考察する上でたいへん興味深い結果が得られるものと期待される。

(39) Vermeule, E. (*Greece in the Bronze Age* Chicago/London 1964 rep. 1972 190 (13世紀半ば); Schachter, *op. cit.* 9f. (ⅢB初期); Blegen, *op. cit.* 169 (13世紀半ば); Buck, *op. cit.* 40ff. (ⅢB末期直前=c. 1240); Taylour, *op. cit.* 157 (1250/40).

(40) Mountjoy, *op. cit.* 16f. (ⅢA2末～ⅢB初).

(41) Spyropoulos, *op. cit.* 171 (ⅢB末～ⅢC初).

(42) Buck, *op. cit.* 39.

(43) Parry, M. は，1930年と1932年の論文 ("Studies in the Epic Technique of Oral Verse-making I Homer and Homeric Style *HSCP* 41 1930 73-147, II The Homeric Language as the Language of an Oral Poetry" *HSCP* 43 1932 1-50) でホメロスの口承叙事詩の性格を明らかにした後，ユーゴスラヴィアの吟唱詩人による検証を行なっている。See Lord, A.B. "Homer's Originality: Oral Dictated Texts" *TAPA* 84 1953 124-134.

(44) Kirk, G.S. "Homer and Modern Oral Poetry" *CQ* 54 1960 271-281; *Idem.* "The Homeric Poems as History" *CAH* 2-2 3rd ed. 1975 848. Kirk はホメロスの叙事詩が完成して文字化されるまでの200年間前後（6世代），ほとんど変えられることがなかったとする。

(45) Nilsson, M.P. *The Mycenaean Origin of Greek Mythology* 1932 rep. 1972 London 10ff.; *Idem.* The Minoan-Mycenaean Religion and its Survival in Greek Religion 1927 rev. ed. 1949 New York 616-9.

(46) Kirk, *CAH* 2-2 3rd ed. 820-850; Dickinson, O.T.P.K. "Homer, the Poet of the Dark Age" *GR* 33 1986 20-37. Cf. Sherratt, E.S. "'Reading the Texts': Archaeology and the Homeric Question" *Antiquity* 64 1990 807-824.

(47) Finley, M.I. *The World of Odysseus* 1954 rev. 1965 London rep. 1979 26-50 (邦訳『オデュッセウスの世界』下田立行訳 1994 岩波書店)

(48) Morris, I. "The Use and Abuse of Homer" *CA* 5 1986 81-138.

(49) *Il.* 7–219 etc.

(50) Taylour, *op. cit.* 137f.

(51) Morris, *op. cit.* 89f.

(52) ミケーネ時代の記述について次に引用するように Finley のみはきわめて懐疑的である。 Finley, *op. cit.* 46. "That there was a Mycenaean kernel in the Iliad and Odyssey cannot be doubted, but it was small and what little there was of it was distorted beyond sense or recognition."

(53) *Il.* 13–575, 16–325, –344, –607, 20–471, –477 etc.

(54) *Il.* 8–1, 19–1, 23–226f.

(55) *Il.* 2–48, 11–1, 19–1 ; *Od.* 5–1

(56) *Il.* 1–437 ; Od. 2–1, 8–1, 17–1

(57) *Il.* 4–50, 20–309 etc.

(58) *Il.* 7–180, 9–46 etc.

(59) *Il.* 23–143 etc.

(60) *Il.* 1–58 etc.

(61) *Il.* 22–172 etc.

(62) 神域は暗黒時代初期から独立して存在していたが，次注のような屋根が葺かれた建物としての神殿は8世紀ごろから始まる。 See Coldstream, J. N. *Geometric Greece* 1977 London 317–327. ; Sourvinou-Inwood, C. "Early Sanctuaries, the Eighth Century and Ritual Space –Fragments of a Discourse–" *Greek Sanctuaries* Marinatos, N. & Hägg eds. 1993 London 1–17.

(63) *Il.* 1–39「私が屋根を葺いた神殿を…… (nēon erepsa)」他，『イーリアス』に7箇所，『オデュッセイア』に2箇所記されている。 See Powell, *op. cit.* 195 n. 34.

(64) ミケーネ時代でもわずかながら火葬が確認されている。 See Taylour, *op. cit.* 148 ; Dickinson, O. *The Aegean Bronze Age* 1994 Cambridge 231.

(65) Kurtz & Boardman, *op. cit.* 51–55 ; Coldstream, *Geometric Greece* 81, 119ff. *Cf. ibid.* 50.

(66) *Il.* 14–182f. まったく同じ語 (hermata …… triglēna moroenta) が『オデュッセイア』の中でも使われている (18–297f.)。

(67) グラニュレーションを施した3本の突起を持つ黄金のイヤリング（レフカンディ出土：Popham, Sackett & Themelis eds. *Lefkandi* 1980 London Pl. 171 5–10, 11 ; 231–d）は，まさにこれに相当するが，9世紀ごろ輸入され，後にギリシアで模倣された。 Boardman, J. *The Greeks Overseas* 1964 2nd ed. 1980 London 76 ; Burkert, W. *Die orientalisierende Epoche in der griechischen Religion und Literatur* 1984 Heidelberg Eng. tr. by Pinder, M. E. & Burkert, W. *The Orientalizing Revolution* 1992 London 15.

(68) *Il.* 23–740ff.

(69) *Od.* 4–615ff., 15–115ff. ; Burkert, *op. cit.* 16.

(70) Ventris, M. & Chadwick, J. *Documents in Mycenaean Greek* 1973 Cambridge, po–ni–ki–pi = palm–tree (No. 244 and Additional Commentary 502), po–ni–ki–ja = painted–crimson (Ns. 270, 274), po–ni–ki–jo = Phoenician spice (No. 99). See Muhly, *op. cit.* 32ff.

(71) ホメロスでは6箇所シドンと表現されているが (*Il.* 23–743 ; *Od.* 4–84, –618, 13–285, 15–118, –425)，フェニキアとシドンとの関係が混乱していると思われる記述もある (*Od.* 4–83ff.)。

(72) ギリシア人の地中海進出はクノッソス崩壊後のＬＨⅢ期に始まる (Blegen, op. cit. 181ff. ; Ridgway D. *L'Alba della Magna Grecia* 1984 Milano Eng. tr. *The First Western Greeks* Cambridge 3–10)。とくにキプロスはミケーネ時代後期のギリシア人が植民したと解釈されるほど，交易活動にとって重要な位置を占めていた (Taylour, *op. cit.* 148f. ; Blegen, *op. cit.* 181ff. ; Cf. Kling, B.

"Local Cypriot Features in the Ceramics of the Late Cypriot IIIA Period" Peltenburg, E. ed. *Early Society in Cyprus* 160–70; Catling, H. W. "Cyprus, 2500–500 BC; the Aegean and the Near East, 1500–1050 BC" Jones, R. E. ed. *Greek and Cypriot Pottery* 1986 Athens 542ff.)

(73) Braun, T. F. R. G. "The Greeks in the Near East" *CAH* 3–3 2nd ed. 1982 5ff.; Coldstream, *Geometric Greece* 63ff.; この時期フェニキア人はキプロスに植民して進出している (Reyes, A. T. *Archaic Cyprus* 1994 Oxford 18ff.)。

(74) Mondi, R. "Greek and Near Eastern Mythology" Edmunds, L. ed. *Approaches to Greek Myth* 1990 Baltimore 146f.; Burkert, *op. cit.* 96ff.

(75) オリエント神話がギリシア神話に影響を与えたことは認められているが，その度合いについては研究者によって大きく異なる。オリエント神話はホメロスとは無関係で，ヘシオドスから影響が見られる (Muhly, *op. cit.* 58 "There is no evidence to show that Ugaritic literature had any real influence upon the development of the Homeric epics.") と過小評価とも思われる意見から，オリエント神話がホメロスとヘシオドスの宇宙観に大きな影響を与えた (Mondi, *op. cit.* 157ff.)，ミケーネ時代からオリエント神話はギリシアに入っていたが，9世紀ごろからギリシア神話に大きく作用し始めた (Penglase, C. *Greek Myths and Mesopotamia* 1994 London)，さらに『オデュッセイア』そのものが『ギルガメシュ叙事詩』の表面的模倣にすぎない (Gresseth, G. K. "The Gilgamesh Epic and Homer" *CJ* 70 1975 16 "Homer is perhaps a better poet and less of a philosopher.")，あるいは『イーリアス』はミケーネ時代末期メソポタミアから直接ギリシアへ入ってきた『ギルガメシュ叙事詩』である (Webster, T. B. L. "Homer and Eastern Poetry" *Minos* 4 1956 104–116) とする意見があるなど評価はさまざまである。

(76) 吟唱詩人のこうした活動は『オデュッセイア』の随所に表現されている (*e. g.* 8–480ff.)。

(77) Burkert, *op. cit.* 106ff. 彼は東方化時代にこれらの話がギリシアに伝わり，短期間の内に急速に広まってテバイ伝説が成立したと考えている。

(78) Str. 14–1–27; Apoll. *Epit.* 6–2ff. ストラボンはこの逸話をヘシオドスに帰している。

(79) Barnett, R. D. "The Sea Peoples" *CAH* 2–2 3rd ed. 363–6.

(80) Hdt. 7–91; Str. 14–5–16; Paus. 7–3–2. Stubbings, F. H. "The Recession of Mycenaean Civilization" *CAH* 2–2 3rd ed. 355ff.

(81) Boardman, *op. cit.* 45f.; Burkert, *op. cit.* 52f. Burkert は，オリエント文明とギリシアが出会った地点がキリキアであったと考えている (……Cilicia, a place where……oriental and Greek traditions meet in a special way)。

(82) Boardman, J. "Al Mina and History" *OJA* 9 1990 169–190.

(83) *Il.* 24–221; *Od.* 21–145, 22–318ff. *Burkert, op. cit.* 46ff.

(84) サモス島ヘライオンで出土した3体のブロンズ小像「犬を連れた人 ('Hundehalter')」はバビロニアの癒しの女神グラの信仰と関係があることが指摘されている (Kyrieleis, H. "Babylonische Bronzen im Heraion von Samos" *JdI* 94 1979 32–48)。犬はアスクレピオスと関わりがあり，医術の神もオリエントから入ってきた可能性が高い (Burkert, *op. cit.* 75ff.)。

(85) 『オデュッセイア』の中でテイレシアースは「航海の方法 (10–537ff.)」「帰国についての諸注意と予言 (11–100ff.)」「イタケー島までの帰国の方法 (11–478ff.)」と，オデュッセウスの道中に関することばかりで，これ以外についての予言は「霊魂に話をさせる方法 (11–146ff.)」のみである。

(86) *FGH* 239A–7

(87) アルファベットについて古代史家たちは，「ムーサイが発明」「カドモスが発明」「フェニキア人が発明してカドモスがもたらした」「カドモスの前にエジプトのダナオイ人が持ってきた」など混乱している (*FGH* 1 F20)。カドモスとアルファベットの関係が重視されているのは，ヘロドトスが詳細に論じ

ていること (5–58ff.) とアルファベットがフェニキア文字を改変して作られたという現代の知識によるものである。なお本文結論で述べるように，カドモスがフェニキア人であるという伝説は，反フェニキア感情が高まっていった時期に生まれたものと思われる。その年代を割り出すことは難しいが，ホメロスとヘシオドスには言及されておらず，6世紀半ばのヘカタイオス断片が初出史料であること，ヘシオドスの執筆年代は7世紀前半と推測されていること（Janko, R. *Homer, Hesiod and Hymns 1982* Cambridge）から，この間であることはほぼ間違いないであろう。Braun（*op. cit.* 30）はカドモス伝説とエウローペー伝説を結びつけたのはコリントのエウメーロスであるとしているが，エウローペー伝説との合体はカドモスがフェニキア人であるという伝承に基づいていたはずである。エウメーロスは伝承では8世紀とされているが，実際には7世紀の人物であろうと考えられており（Hammond, N. G. L. "The Peloponnese" *CAH* 3–3 2nd ed. 340; Janko, *op. cit.* 231ff. ），これらの見解が正しければ，カドモス伝承はヘシオドスとほぼ同時代のうちに形成されていったものと推測される。

(88) Str. 16–2–28; Paus. 4–35–9. Burkert, *op. cit.* 85.

(89) West, M. L. "The Rise of Greek Epic" *JHS* 108 1988 151–72.

(90) Schachter, *op. cit.* 6ff.; Buck, *op. cit.* 61.

(91) 戦争の年代については Powell（*op. cit.* 231＝800ごろと推定）を除いて，8世紀末で一致している（Starr, C. G. *The Origins of Greek Civilization 1100–650 BC* 1961 New York rep. 1991 268; Coldstream, J. N. *Greek Geometric Pottery* 1968 London 200–01; Jeffery, *op. cit.* 63–70)。戦争の原因については，交易と植民上の争いもあったとする考えも多い（Boardman, *The Greeks Overseas* 42; Coldstream, *Geometric Greece* 200)。

(92) Thouk. 1–15; Hdt. 5–99; Str. 10–1–11ff.

(93) Coldstream, *Geometric Greece* 201. Cf. Jeffery, *op. cit.* 66f.; *Lefkandi* I 423–7.

(94) Hes. *Erga* 654ff. Jeffery, *op. cit.* 65.

(95) Buck, *op. cit.* 94; Coldstream, "Hero–Cults" 15.

(96) *Od.* 13–273ff. , 14–288ff. , 15–415ff.

付記：昨年夏，本学の共同研究制度により，本学芸術学部河原助教授ならびに名古屋大学文学部周藤助教授とともに，フェニキア人がギリシア文化黎明期に及ぼした影響を探ることを目的として，ギリシア・トルコ・キプロスの各地を訪問する機会に恵まれた。本稿は訪希によって得られた知見と史資料をもとに作成したものであるが，研究の初期段階にあるため中間報告にすぎない。なお，両助教授に有意義な示唆を大いに受けたものの，本稿の内容に関する責任は執筆者一人が負うものである。また，共同研究の実行に際してご協力いただいた本学関係諸氏には，ここに謝意を表すことを許されたい。